



むつかしい世の中

佐藤愛子

むつかしい世の中

佐藤愛子



佐藤愛子（さとう・あいこ）
一九二三年、佐藤紅緑を父とし、
サトウ・ハチローを兄として大阪
に生まれる。甲南高女を卒業。六
三年に「ソクラテスの妻」が芥川
賞候補となり文壇の注目を浴び
る。六九年『戦いすんで日が暮れ
て』で直木賞を、七九年『幸福の
絵』で女流文学賞を受賞する。著
書として他に『加納大尉夫人』『鎮
魂歌』『その時が来た』『愛子』な
どがある。

むつかしい世の中

一九八〇年一月二〇日第一刷印刷
一九八〇年一月二五日第一刷発行

定価 一一〇〇円

著者 佐藤 愛子

発行者 寺 田 博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒一〇三 電話（〇三）二六二九七五三
振替口座（東京）六一七一八三

印刷・製本 図書印刷

（落・乱丁本はお取替え致します）

むつかしい世の中——目次

詐欺師春彦

7

富士は五月晴

43

風の男

79

ペティ

129

むつかしい世の中

179

続・むつかしい世の中

219

装画
丁

菊小
地野
信忠
義弘

むつかしい世の中

詐欺師春彦

借金取りに追われている春彦は、今では風のように歩くという噂だった。

最近、彼は頬から顎にかけて髭を生やした。彼の毛質は太くて硬い。それでその髭で縁取られた彼の顔は、何か黒いけものの太い尻尾を顔に巻きつけたように見えるのだった。彼はその髭をカモフラージュのために生やしたのである。

彼が街の混雑の中を歩いて来ると、人々は注目した。その余りに黒々とした大仰な髭に人は驚くのである。髭はカモフラージュの役目を果たすどころか、却って人目を惹く。おまけに彼は跛だった。

この頃、彼は黒いズボンに極太毛糸の黒いトックリセーターを着ていた。極太毛糸のトックリセーターは、今の季節にはいささか暑いので彼は上着を着ていない。その黒ずくめの跛の髭男が、黒いツムジ風のようにやって来て一瞬のうちに通過して行く、その異様な早さに人々は

思わずふり返る。しかし彼は、その髭で彼の正体は隠れていると信じているのだった。

五島春彦は数日前に倒産した。

これで彼は七年の間に三度、倒産したことになる。七年前、それは彼が丁度四十歳になった年の暮のことだが、その頃、彼が経営していた映画プロダクションがつぶれ、彼の妻は小学生の女の子を連れて別れて行った。

二度目の倒産の時、彼と同棲していた酒場の女はどこかへ行ってしまった。今、春彦には三カ月前に結婚した妻と、その妻の連れ子がいる。ミオ子という名のその妻は、生れたばかりの子供を抱えて夫に捨てられ、苦勞を重ねた三十前の女だった。彼女は男に失望し、もう二度と結婚などするまいと決心して、ある大手企業の経理課に勤めていたのだが、春彦を愛するようになって結婚を決意した。

「ある時、ぼくは理解したんです。ぼくの人生と、彼らの人生とが違うことを。彼ら——わかりますか。それはぼくのように片輪ではない、健康な人々のことです。彼らとぼくとはちがうんだ、とぼくは自分にいいきかせました。ぼくの人生は、そこから出発したんです。ぼくが外界に向って心の扉を閉じたその地点からです。ぼくは今、心の扉を閉じたといったけれど、よ

り正確にいうならば、心の扉を閉さなくてはいけないんだ、と思ったその時から、という意味です。閉さなくてはいけない。なぜか？ ぼくは不具者だからです。そして不具者は罪悪なんだ……。十六歳のぼくはそう思ったんです」

ラフマニノフのピアノ協奏曲二番が春彦は好きだった。それでその時も彼が注文して、喫茶店にはその音楽が鳴り響いていた。

「ぼくは最初の妻と別れた。二番目の女とも別れた。ぼくは彼女たちと争うたびにいつもいいましたよ。『ぼくを理解しなくなっているんだ。解らなくなっているんだよ』って……」

そのときミオ子の双の瞳にひとりで涙が湧き出て来た。彼女には春彦のいつていることがよくわからなかったが、春彦が孤独な謙遜な、崇高な魂の持主であることだけはわかったと思つた。

「わたし、あなたをお慰めしたいわ」

と彼女はいった。

「でもわたしにはどうすればお慰め出来るのかわかりません。わたしは頭もよくないし、何の力もない女だから……」

すると春彦はその馬のように大きな美しい瞳でじつと彼女の眼を覗いていった。

「あなたは自分でも知らずに、ぼくをわかつていくれる。ぼくはそれだけで十分だ」

その春彦の眼にはキラリと光るものがあつたのである。そうして三日後に彼らは結婚した。

春彦は今こそしっかり者の母から勘当を受けている身だが、もとをただせば一代で財を成した鉦山王五島房雄の孫に当る、五島家の御曹子である。父は春彦が大学生の頃に亡くなり、氣丈の母が一家を取りしきつて来た。しかしその母もこの頃はとみに健康が衰えて来たと伝える人がいて、春彦は軽く笑いながら、ミオ子にこんなことをいったりした。

「今こそ傘張り浪人だがね。時来たらば、迎えの駕籠が城から来るよ」

ミオ子が結婚を決意したもう一つの理由に、そんな春彦の言葉が作用してはいないとはいひ切れないのである。

しかし、迎えの駕籠はなかなか来なかつたので、春彦は春風の吹く街を彼を追う人たちの眼を逃れて、風のように歩かなければならなかった。

彼はいったい何人の人間に追われているのか。今では春彦自身にもその人数はわからなくなっているにちがいない。彼を追う人は事業の取引関係の債権者ばかりでない。マージャンの賭金をごま化された人、競馬のノミ屋、酒場の用心棒、高利貸にからむヤクザから、ラーメン屋、マージャン屋、なけなしの貯金を春彦の事業に投資してすっかりなくしてしまった小学校

時代の友達まで、その種類は雑多で、数は数えることが出来ないであろう。

彼はなぜか、人々から「先生」と呼ばれていた。いったいなぜ彼が「先生」なのか、いつ、誰がそう呼び出したものか誰にも（彼自身にも）わからなかった。だがよく考えてみると、最初に「先生」といい出したのは、ボクサー崩れの大井初太郎であつたかもしれない。

大井初太郎は春彦より七歳も年上であつたが、一時、春彦に心酔していた。初太郎は山本という高利貸の用心棒をしていて、時々、山本に手形の割引を頼んだりしていた春彦と知り合つたのだ。

「あの人はただの商売人じゃねえです」

と初太郎は山本高利貸によくいった。

「あの人は儲けるために商売やつてるんじゃないだそうですよ」

「儲けるためにやつてねえ？　じゃあ、何のためだ」

「夢のためです！」

初太郎のその口調が昂然となつたのを見ても、その時、初太郎がいかに春彦に心酔していたかがわかるのである。

「夢のため？　ケッ！」

山本高利貸は、嘲笑を吐き出し、

「そんなねぼけた奴に、これから金は貸せねえよ」

「しかし、大将……」

初太郎はムキになっていった。

「世の中に、そんな人間が一人くらいいたっていいじゃねえすか。夢のため……」

「夢って何の夢だ？」

そう聞かれて初太郎は言葉に窮した。何の夢か、初太郎はそれを聞いていなかったからである。

しかし今、大井初太郎は、春彦を見つけ次第、ぶっ殺してやる、といき巻いていた。初太郎は春彦から、人間は金のために生きるものではないといわれ、山本高利貸の用心棒をやめて堅気の暮しをする気になった。春彦は初太郎のその考えを非常に喜び、もしその気があるならば、ぼくはいつでも我が社に迎える意向がありますよ、といった。その時の「我が社」とは、「ゴトウ企画」という、広告フィルムの下請会社である。

そんなある日、初太郎が春彦を訪ねると、春彦は一流広告代理店として全国的に有名な東亜エージェンシーからの二千万円の仕事の発注伝票を机の上に置いて、貧乏ゆすりをしながら煙